

平成30年度北方四島交流事業報告書

山口県連合婦人会

会長 藤家幸子

1 はじめに

本事業に、日本文化交流員（布草履作り）として、参加の機会を得ました。なかなか行ける所ではありません。貴重な体験をさせていただけることの責任を再確認。

日本文化での交流は、5年前に全地婦連からの推薦で参加し、「着物」「茶道」を通して、和装文化にロシア人の興味や関心がとても強く、憧れを抱いていたことはよく理解できましたが、わがままな振る舞いが平気だという印象も持ちました。

当時、「新クリル発展計画」が打ち出されていたので、5年間で何がどのように変わってきたのか、制限された交流時間の中で少しでも感じ取り、今後の啓発活動に繋がりたいと強く思っていたので参加でした。



2 事前研修から学んだこと

(1) 児玉泰子団長

5年前は、機体の不備で東北上空から羽田空港へ引き返した経緯もあり、北連協の事前研修は、受けることが出来なかったのもとても新鮮でした。

- 健康管理を第一に。団員64名が1家族として行動を。家族でありながら役割をきちんと認識すること。
- 国後島・択捉島での現地気候情報や入域に関する具体的な行動などの確認。
- ホームビジット（お茶会）は、「互いに理解し合い仲良くなれば良い」等
- ※ 北対協から届いた資料を熟読してはいましたが、改めて緊張しました。

(2) 北方四島交流について

- 平成4年～平成29年まで357回13,510人が交流事業へ参加。
- 元島民の方々の平均年齢も83歳と高齢に。
- 政府は新しいアプローチとして2016年12月、山口県長門市にてプーチン大統領と安倍首相の交渉により、共同経済開発という新しい局面が打ち出された。

ビザなし交流参加者は伝道師です。「行って」「見て」「知る」こと。国民に対して、新たな広報活動を！世論啓発の波及効果を高める活動を推進されるように。

※これまでに、毎年「元島民のお話を聞く研修会」や啓発活動の場として「小学生や地域住民」「各地域の婦人会会員」「県内各組織」などを対象に実施し、署名活動も展開してきました。

また、「ジョバンニの島」の上映会はこれまでの啓発活動が、更に理解と協力を深めることに効果的です。これからも広く啓発活動を継続し、国民の声として届けたいと思います。

(3) 講話 —鈴木咲子氏—

- 小学4年生まで択捉島で生活。北方領土について詳細を説明。
- 太平洋敗戦後、ソ連兵による強制占拠。家を仕切りソ連軍の家族と間仕切りしての居住など当時の生活状況を語られる。
- 昭和23年12月、絶望的な気持ちの中樺太から函館への送還はきびしくみじめな生活。
- 平成2年 墓参へ初参加。薬取村の60戸余りの住居は全て廃墟。心癒されたのは43年前からの大自然そのものだった。村の祭や学校生活など思い出すと温かくなる。
- 平成4年、初めての墓参から2年後北方四島交流事業が始まる。最近では、日本人墓地の草刈がなされたり、「こんにちわ」と、声をかけてくれるロシア人の子どもに、日本人のことを思いやってくれるロシア人が居だことに心打たれ、今までにない光景にこれまでと違った思いがこみあげてきた。
- 大自然の懷の中で、ロシア人と交流を進め、共に住んでもよいかなと思うようになった。

※静かに、しかも信念を持った語り口調に当事者でなければ語れない言葉の一語一語。これまで以上の感慨深いものと国民としての使命が強くなりました。

(4) 講演— 石川一洋氏 (NHK解説委員) —

〈最近の日ロ関係〉

ポイント：平和条約締結に向けて「必ず解決する」

- ◎ 国境線はどこに。
- ◎ 実態として、日ロが共に同じ場所で居住することの大切さ。(共同経済開発がそれに伴うから)
- ◎ 人と人の行き来。そのための建物建設。領土問題にふれずに、共同開発のシステムをつくるのが大切ではないか。
- ◎ この枠組みが、世界の領土問題解決にも通じるのではないか。
- ◎ 交渉の目的は、通商いわゆる貿易関係をより友好的にと考えている。これが平和条約へと繋がる。
- ◎ 外交交渉は、結果である。元島民の島への自由な行き来。
このことは、小さな一歩であるが、大事な一歩になる。



※ 石川先生のご講演を直接拝聴できる初めての機会を得ました。お若い頃からNHKテレビニュースで旧ソ連・ロシアの現状や日本との関係など、蒼く澄み切ったオホーツク海を背景に報道してくださるお姿を何度も拝見していました。具体的な解説が聞けて意義深いことでした。

3 「国後島」入域

5年前は「新クリル発展計画」でしたが、今回は「新」の文字が取り払われています。5年前と、島の様子がどのように変わり、ロシア人が本州の日本人に対してどのように接してくれるのでしょうか。

- ① 表敬訪問での会場は、建設されて間もなくの「文化会館」。団員全員が入場でき、「日本の皆様にご挨拶できることを大変うれしく思います。」第一声から、「四島交流事業に参加の65名の皆さんは大親友です。」等、親切で親日的。
- ② 道路工事測量中だった島の中心部は、全て舗装されカラフルな住宅が多くなり、各戸には大きな衛星通信用のパラボラアンテナが設置。島の人口が増加していることは一目瞭然。しかし、郊外の電柱は、伐採された樹木そのものに配線。
- ③ 舗装工事はしっかり整備されているが、信号機はない。しかし、標識が数多く設置され、横断歩道もできている。スピードを出して走行する車からは、土埃が舞い上がる。一步中心から外れるとまだまだ舗装に至ってないのだろう。
- ④ 主な水産業や新しい文化会館、図書館、保育幼稚園、芸術学校、医療等に関する施設の増設や専従職員などの優遇など、ロシア色拡大をしっかりと誇示。
- ⑤ ホームビジットに応募が400戸。この度は18戸に割り当てた。日本の文化を全く知らない。が、知ってとても行儀が良くなった。アンケートから、「子ども同士の交流をしてほしい。」など、四島に居住するロシア人の要望が示される。文化交流を通して日本をよく知ってもらうことが大切。

しかし、「四島で共に暮らす日本人が居ることで簡単に解決できること。」です。そういう声をロシア政府に島在住のロシア人の大切な要望として環境整備に力を入れるよう申し入れをするべきだと思う。

※一日日程の国後島ではありましたが、夕食交流会の友好の家 {通称ムネオハウス} が、綺麗に掃除され、通路に雑多な荷物がなく整理整頓がなされていたのに驚いた。来客への気配りを感じました。



交流会では、「布草履初めてです。また、作りたいです。」の声に「本州ヤマグチへぜひいらっしゃい。」何度も伝えました。

懇談会で住民は、日本料理「スシ」を希望。生の魚でなくても、ちりめん（しらす干し）を使い旬の茗荷・大葉・生姜・らっきょうなどで素朴で美味しい寿司できます。

4 「択捉島」入域と住民交流会を通して

期間中、好天に恵まれ四島のロシア人達は「夏を運んできてくれた。」と、大喜び。寒い毎日を送っていたらしく、ロシア人家族たちを照りつける太陽が海遊びを満喫させている。

鈴木咲子氏は、「8月に入ると僅か数日の夏日になるので別飛の海岸はオホーツク海の水が冷たい。砂浜で体をしっかり温めては海に入る、を繰り返し海水浴を楽しんだ」と、思いを遠く巡らせ語られる。

(1) ー住民交流会ースポーツ文化会館フロアにて

① 20人を対象。夏休み期間中なので男女を問わず子どもたちが多い。母親が付き添ってはいるが笑顔で見守り、作り上げた子どもの草履にキスしていた。「僕は、3人兄弟です。家に帰ったら、みんなに見せてあげます。」親子で「スパシーバ!」を連発。

② ロシア本土（八海近郊）からの観光客二人連れは、「地元の知り合いが、今日のイベントを教えてくれたので参加しました。良いお土産ができて嬉しいです。記念にあなたのお名前も撮影します。」胸に付けた交流員名札まで、スマホで撮影。「この仕事を何年前からやっていますか。」「型紙が欲しい。」「鼻緒の作り方を教えて。」興味通津。

③ キットを入れたバスケットを手に、順番を待ちながら前者の作業をじっくり観察。手際よく能率的に交流会が進んだ。途中では、「お疲れでしょうから、少しはお休みください。」と、いたわりの言葉が発せられた。

※「作る喜び・伝わる絆」これまでの交流の成果だと思う。本州の日本人と四島で暮らすロシア人が長い歳月をかけて地道に関わりを持ってきたから繋がって行くことが実証されている。「関わりの一歩が大きな繋がりになっていく」ことを確信した。

(2) ーホームビジットー女医宅へ

住宅街の一画に案内され、ご主人が出迎えてくださった。ご挨拶が済むと直ぐに、「手を洗われますか」と、Drらしい対応。かわいいお風呂の蛇口ですっきり。これからの1時間半3人で頑張ろうねが合言葉。



5 おわりに

布草履は、ロシア人が直接手作業を通して日本文化に関わる活動です。素朴な作業ではありますが、出来上がった草履はすぐに使えることと世界で一つしかない自分の作品となります。興味関心を持ってくれるだろうか、という不安はありましたが、可愛い色合いを考えてしっかり準備をしました。

